

デーリー東北

2026年(令和8年)9月23日(水曜日) (7)

私の地元は海から遠く離れた内陸部であるため、魚介類や生ものに特別な愛着があったわけではない。むしろ、苦手な方だったと言っている。

そんな私の食の好みを大きく変えたのが、八戸との出会いだった。移住して間もない頃、脂ののった焼き鮭と新鮮なホタテの刺身を口にした。これまで知っていた魚料理とは全く別物だった。そのおいしさに驚き、海の幸の魅力にすっかり夢中になってしまった。

八戸港は、東北有数の漁港であり、工業港であり、国際貿易港でもある。新鮮な魚介が水揚げされる一方、臨海工業地帯には多くの企業が集まり、外国人技能実習生をはじめ、さまざまな国や地域の人々が行き交っている。海と人が出会う「十字路」のような場所だ。

太平洋の魚たちは、海流に乗って八戸へやって

来る。そして、海を渡ってきた人々もまた、仕事や学びを求めてこの街へやって来て、やがて別の場所へ旅立っていく。少し無理のある例えかもしれないが、私にはその姿が魚の「回遊」とどこか



重なる。港町とは本来、そうした回遊を受け入れる場所

なのだろう。魚も人も、この街で出会い、育まれ、ときには加工され、新たな価値へと姿を変えて再び外の世界へ送り出されていく。八戸には、そうした循環を包み込む大きな懐の深さがあるように思う。

振り返れば、私の日常は、魚との出会いと、人との出会いに支えられてきた。2023年1月、市内で唯一の映画館だった「フォーラム八戸」が閉館し、八戸は映画館のない街となった。映画を専門とする私が赴任した当初、そのことに少なからず寂しさを感じた。しかし同時に、「八戸と映画の関係性」について考え続けてきた。

だからこそ私は、映画という誰もが楽しめる文化の力を通して、人と人をつなげたいと思っている。魚も人も回遊してくる港町・八戸で、自分なりの新しい価値を生み出したい。

日本人も外国人も同じ場所に集い、一緒に映画を観て、語り合う。そんな上映会をいつか実現できたらと考えている。海の幸との出会いが、私を八戸へとつなげてくれた。そして今度は、人と人、人と文化をつなぐ新たな縁を育んでいきたい。

いつの日か、この街から遠ざかったように見えた映画という文化の海流が、再び戻ってくることを願っている。

(たい・しゅうき) 八戸工業大感性デザイン学部助教、中国湖南省出身、八戸市在住

八戸港から世界へ

戴 周杰

著作権保護のため
画像は表示できません

「小舟渡海岸」
鈴木 俊喜

＝2025年度八戸アートサポーター会受講生絵画展＝

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。